

浅井了意『伽婢子』卷二

牡丹灯籠

年毎の七月十五日より二四日までは、聖霊(せいりょう)の棚をかざり、家々これを祭る。

又いろ／＼の灯籠を作りて、或は祭の棚にともし、或は町家の軒にともし、又聖霊の塚に送りて石塔の前にともす。

其灯籠のかざり物、域は花鳥域は草木、さま／＼しほらしく作りなして、其中にともし火ともして夜もすがらかけおく。

是を見る人道もさりあえず。

又其間に踊子どもの集り、声よき音頭に頌歌(しようが)出させ、振よく踊る事、都の町々上下皆かくの如し。

天文戊申(つちえさる)の歳(ごし)、五条京極に萩原新之丞といふ者あり。

近きころ妻に後れて愛執(しふ)の涙袖に余り、恋慕の焰胸をこがし、ひとり淋しき窓のもとに、ありし世の事を思ひ続けるに、いとゞ悲しきかぎりもなし。

聖霊祭りの営みも、今年はとりわき、此妻さへ無き名の数に入れる事よと、経読み回向して、終に出ても遊はず、友だちのさそひ来れども、心たゞ浮立たず、門(かど)にたゞみ立てうかれをるより外はなし。

いかなれば立(たち)もはれなず面影の身そひながらかなしかるらむ  
とうちながめ涙を押拭ふ。

十五日の夜いたく更けて、遊びありく人も稀になり、物音も静かなりけるに、一人(ひとり)の美人その年(はたち)ばかりと見ゆるが、十四五ばかりの女の童(わらは)に、美しき牡丹花の灯籠持たせ、さしもゆるやかに打過る。

芙蓉のまなじりあざやかに、楊柳の姿たをやかなり。

かずらのまゆ、みとりの髪いふばかりなくあてやか也。

萩原月のもとに是を見て、是はそも天津乙女の天降りて、人間に遊ぶにや、龍の宮の乙姫のわたつ海より出て慰むにや、誠に人の種ならずと覚えて、魂飛び心浮かれ、みずからおさえとゞむる思ひなく、めで惑ひつゝ後に随ひて行く。

前(さき)になり後(あと)になりなまめきけるに、一町ばかり西かなたにて、かの女うしろに顧みて、すこし笑ひていふやう、みずから人に契りて待侘たる身にも待べらず。

唯今宵の月に憧(あこがれ)出て、そゞろに夜更け方、帰る道だにすさまぎや。

送りて給(たべ)かしといえは、萩原やをら進みていふやう、君帰るさの道も遠きには、夜深くして便(びん)なう侍り。某のすむ所は塵塚たかく積りて、見苦しげなるあばらやなれど、たよりにつけてあかし給はゞ、宿かし参らせむと戯ぶるれば、女打笑見て、もる月を独り詠めてあくる(しさを、嬉しくもの給ふ物かな。

情によわるは人の心ぞかしとて立もどりければ、萩原喜びて女と手を取組つゝ家に帰り、酒とり出し、女の童に酌とらせ少し打飲み、傾く月にわりなき言の葉を聞くにぞ、今日を限りの命ともがなと兼ての後ぞ思ふ。

萩原、また後のちぎりまでやは新枕(にひまくら)たゞ今宵こそかぎりなるらめと云ひければ女とりあえず、ゆふな／＼まつとしいはゞこざらめやかこちがおなるかねごとわなぞと返しすれば、萩原いよ／＼嬉しくて、互にとくる下紐の結ぶ契や新枕、交す心も隔なき、睦言はまだ尽きなくにはや明方にぞなりにける。

萩原、その住給ふ所はいづくぞ、木の丸殿にはあらねど名のらせ給へといふ。

女聞て、みずからは藤氏(ふぢうち)のすゑ二階堂政行の後也。

其頃は時めきし世もありて家栄え侍りしに、時世移りてあるかなきかの風情にて、かすかに住侍べり。

父は政宣京都の乱れに打死し、兄弟皆絶て家をとろへ、我が身独り女(め)のわらはと万寿寺のほとりに住侍り。

名のるにつけては、はづかしくも悲しくも侍べる也と、語りける言の葉優しく、物ごしさやかに愛敬(あいぎやう)あり。

すでに横雲たなびきて、月山の端に傾き、ともし火白うかすかに残りければ、名ごり尽せず起き別れて帰ぬ。

それよりして日暮るれば来たり、明がたには帰り、夜毎に通ひ来ること更に約束を違へず。

萩原は心惑ひてなにはの事も思ひ分けず、此頃女のわりなく思ひかわして、契りは千世も変らじと通ひ来る嬉しさに、昼といえども又こと人に逢ふ事なし。

かくて廿日余りに及びたり。

隣の家によく物に心得たる翁のすみけるが、萩原が家にけしからず若き女の声して、夜毎に歌うたひわらひあそぶ事のあやしきよと思ひ、壁のすき間よりのぞきてみれば、一具の白骨と萩原と、灯のもとにさしむかひて座したり。萩原ものいへば、かの白骨手あしうごきしゃれこうべうなづきて、口とおぼしき所より声ひびき出て物がたりす。翁大におどろきて、夜のあくるを待ちかねて萩原をよびよせ、此ほど夜ごとに客人ありと聞ゆ。

誰人ぞといふに、さらにかくしてかたらず。翁のいふやう、萩原はかならずわざはひあるべし。何をかつつむべき。今夜かべよりのぞき見ければ、かうかう侍べり。をよそ人として命生たる間は、陽分いたりて盛に清く、死して幽霊となれば、陰気はげしくよこしまにけがる也。此故に死すれば忌ふかし。今汝は幽陰気の霊とおなじく座して、これをしらず。

穢てよこしまなる妖魅とともに寝て悟ず。たちまちに真精の元気を耗べらば、薬石(やくせき)・鍼灸(しんきゅう)のをよぶ所にあらず。伝戸癆(でんこ)の悪証(あくしやう)をうけ、まだもえ出(いづ)る若草の年を、老(をい)さきながく侍(また)ずして、にはかに黄泉(よみぢ)の客(きゃく)となり、葎(こけ)の下に埋も

れなん。諒(まこと)に悲しきことならずやといふに、荻原はじめておどろき、おそろしく思ふ心つきて、ありのまゝにかたる。おきな聞て、万寿寺(まんじゅじ)のほとりに住(すむ)といはば、そこにゆきて尋ねみよとをしゆ。

荻原(おぎはら)それより五条を西へ万里小路(までのこうぢ)よりこゝかしこをたづね、堤のうへ柳の林にゆきめぐり、人にとへどもしれるかたなし。日も暮(くれ)がたに万寿寺(まんじゅてら)に入て、しばらくやすみつゝ、浴室(よくしつ)のうしろを北に行(ゆき)てみれば、物ふりたる魂屋(たまや)あり。

さしよりてみれば、棺(くはん)の表(おもて)に、二階(かい)堂(だう)左衛門尉政宣(まさのぶ)が息女弥子(そくぢよいやこ)、吟松院冷月禅定尼(ぎんせうあんれいげつぜんてうに)とあり。かたはらに古き伽婢子(とぎぼうこ)あり。

うしろに浅芽(あさぢ)といふ名を書(かき)たり。棺の前に牡丹花(ぼたんくは)の灯籠(とうろう)の古きをかけたたり、疑(うたがひ)もなくこれぞと思ふに、身の毛のよだちておそろしく、跡を見かへらず寺をはしり出てかへり、此日比(ひごろ)めでまどひける恋もさめはて、我が家もおそろしく、暮(くる)るを侍かね、あくるをうらみし心もいつしか忘れ、今夜もし来らばいかゞせん、隣(となり)の翁が家に行て宿をかりて明(あか)しけり。

さていかゞすべきとうれへなげく。翁をしへけるは、東寺(とうじ)の卿公(きやうのきみ)は行学兼備(ぎやうがくかねそなへ)て、しかも験者(げんじゃ)の名あり。いそぎ行てたのみまいらせよといふ。荻原かしこにまうでゝ対面(たいめん)をとげしに、卿公(きやうのきみ)おほせけるやう、汝はばけものゝ氣に精血(せいけつ)を耗散(がうさん)し、神魂(しんこん)を、昏惑(こんわく)せり。今十日を過(すぎ)なば命はあるまじき也とのたまふに、荻原ありのまゝにかたる。卿公(きやうのきみ)すなわち符(ふ)を書てあたへ、門(かど)にをさせらる。それより女二たび来らず。

五十日ばかりの後に、ある日荻原東寺にゆきて、卿公(きやうのきみ)に礼拝して酒にえひて帰る。さすがに女の面かげこひしくや有(あり)けん、万寿寺の門前ちかく立よりて、内を見いれ侍りしに、女たちまちに前にあらはれ、はなはだ恨みていふやう、此日比(ひごろ)契りしことの葉のはやくもいつはりになり、うすき情(なさけ)の色みえたり。はじめは君が心ざしあさからざる故にこそ我身をまかせて、暮(くる)にゆきあしたにかへり、いつまで草のいつまでも絶せじとこそちぎりけるを、卿公(きやうのきみ)とかや、なさけなき隔(へだて)のわざはひして、君が心を余所にせしことよ。今幸(さいわひ)に逢(あひ)まいらせしこさうれしけれ。こなたへ入給へとて、荻原(おぎはら)が手を取り、門よりおくにつれてゆく。

めしつれたる荻原が男(おとこ)は、肝(きも)をけしおそれてにげたり。家に帰りて人々につげゝれば、人みなおどろき行てみるに、荻原すでに女の墓(はか)に引(ひき)こまれ、白骨(はくこつ)とうちかさなりて死(し)してあり。

寺僧(じそう)たち大にあやしき思ひ、やがて鳥部(とりべ)山にはかをうつす。その後、雨ふり空くもる夜は、萩原と女と手をとりにくみ、女(め)のわらはに牡丹花(ぼたんくは)の灯笼(とうろう)ともさせ出てありく。これに行あふものはおもくわづらふとて、あたりちかき人はおそれ侍べりし。萩原が一族(ぞく)これをなげきて、一千部(ぶ)の法華経(ほけきやう)をよみ、一旦頓写(とんしや)の経(きやう)を墓(はか)に納めてとぶらひしかば、かさねてあらはれ出ずと也。